

# 令和六年度 公益財団法人納税協会連合会会長賞

人を救う

西大和学園高等学校1年 神谷 璃音

私は生まれた時、呼吸をしておらず、ほとんど死んでいる状態だったそうです。そのため、両親は医師から「おめでとうございます」と言われませんでした。私は三十五センチメートルー〇四九グラムの極低出生体重児として生まれ、『未熟児網膜症』と診断を受けました。

未熟児網膜症は、早く生まれたがために成長しきっていない眼球内で、網膜の血管が異常に増殖し、失明する可能性もある未熟児の病気です。軽症であれば自然に治癒しますが、私の血管は急激に増殖しており、レーザー光線を当てて増殖を止めるしかありませんでした。

生まれてすぐに、医師が泣かない私をNICUに連れていきました。両親は何も見ることができず、産声も聞けず、死ぬのではないかと思ったそうです。

そのあと私はレーザー治療を受け、NICUに三ヶ月弱入院していました。後遺症があるかもしれないと言われましたが、今でも特に悪化することもなく、正常にものを見ることができています。

NICUでの入院費、網膜のレーザー治療費は、ほとんどが未熟児養育医療制度によって助成されました。そのおかげで、自己負担はそれほど多くはなかったそうです。

もしも日本にこの制度が存在していなければ、医療費はさらに高額だったでしょう。両親だけでは到底払えなかったかもしれません。そうすれば、私は今この世にいなかったかもしれません。

私は未熟児養育医療制度のおかげで失明を免れ、生きることができました。私たち家族の退院後の生活も、高額な医療費の支払いに困ることもなく、安定して毎日を送ることができています。私のように、この制度のおかげで助かった子どもがたくさんいると思います。

税金は、とられるというマイナスなイメージがあり、さらに自分の元に返ってきているという感覚もあまりありません。だから、私も税は面倒くさくて嫌なものだと思っていました。しかし、自分が税のおかげで生かされてきたとわかり、その考えは変わりました。

税を納めることは、ひとりでも多くの人の命を救うことにつながると 생각합니다。今はまだ自分に身近な税といえば消費税くらいです。けれど、これから私も税を通じて誰かを助けたいと思いました。